

【研究ノート】

海保青陵「談五行」訳注稿（5）

坂本 頼之

【はじめに】

本稿は拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」（『国士館哲学』第十九号 平成二十七年三月）「海保青陵「談五行」訳注稿（2）」（『国士館哲学』第二十号 平成二十八年三月）「海保青陵「談五行」訳注稿（3）」（『国士館哲学』第二十一号 平成二十九年三月）「海保青陵「談五行」訳注稿（4）」（『国士館哲学』第二十二号 平成三十年三月）に続き、江戸時代の漢学者海保青陵（1755～1817）の「談五行」の訳注を試みたものであり、本稿分で「談五行」の訳注を全て試みたこととなる。

「談五行」は滝本誠一氏編著『日本経済叢書』巻二十六（日本経済叢書刊行会 一九一六年七月（以下『叢書』と記述））に所収・刊行されたものが、同じ滝本誠一氏編著の『日本経済大典』第二十七巻（啓明社 一九二九年六月（以下『大典』と記述））に再録されており、また蔵並省自氏編『海保青陵全集』（八千代出版 一九七六年九月（以下『全集』と記述））にも収録されている。本稿では『叢書』所収の「談五行」を底本とし、『大典』『全集』を併せて参照した。いずれの「談五行」にも句読点と返り点が施されており、基本的にはそれに従って訓読している。「談五行」原文は一つの文章となっているが、本稿では内容により適宜区切っていくつかの文章に分けて番号をふり、【原文】【書き下し】【現代語訳】の順に記した。また【原文】の次に『叢書』『大典』『全集』の文に異同がある場合注をつけた。

青陵の語句の解釈は独特のものが多いため、訳注にあたっては青陵の

著作を参考として解釈することに努めた。特に青陵の五行解釈がまとまった形で述べられている『洪範談』を、訳注を行う上で参考としている（注1）。青陵の著作の引用の際には『全集』を用い、引用した箇所を頁数を附した。青陵の著述は片仮名漢字交じり文が殆どだが、引用の際には参照の便宜上平仮名漢字交じり文に改めた。また引用された各経典、特に『書経』洪範を参照する際には『十三経注疏附校勘記』（中文出版社一九七九年）を用いている（注2）。

（注1） ただし前述の拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」でも触れているように『洪範談』と「談五行」ではその解釈に異なる点も見られる。

（注2） 訳注を作成するにあたっての各資料の詳細については、前述の拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」を参照していただきたい。

【原文（一）】

吾請言其証。大禹謨以正徳利用厚生為三事、以水火金木土穀為六府。是以正徳配水火、猶所受於天、而不用作為者也。以土穀配厚生、猶地之可使為肥瘠、不可使為豐耗也。以金木配利用、是可長可短、可円可方、従人而變革者也。故水火土穀、定位也。金木空位也。定位謂之經、空位謂之緯、依經成章者緯也。依定位能變者空位也。故生々無已者、空位与定位相遇也。故曰、五行合經緯之名、後之言五行者獨謬矣。

【書き下し（一）】

吾請ふ其の証を言はんことを。大禹謨は正徳利用厚生を以て三事と為す。水火金木土穀を以て六府と為す。是れ正徳を以て水火に配す、猶ほ天に受くる所にして、作為を用いざるがごとければなり。土穀を以て厚生に配す、猶ほ地の肥瘠為らしむべくも、豊耗為らしむべからざるがごとけ

ればなり。金木を以て利用に配す、是れ長ずべく短すべく、円すべく、方すべく、人に従いて変革するものなればなり。故に水火土穀は定位なり。金木は空位なり。定位之を経と謂ひ、空位之を緯と謂ふ。経に依りて章を成す者は緯なり。定位に依りて能く変ずる者は空位なり。故に生々已む無きとは、空位と定位と相遇するなり。故に曰く、五行は経緯を合するの名なり、後の五行を言ふ者は独だ謬れり、と。

【現代語訳（一）】

私（青陵）に（注1）、どうか先ほどの（「五行」とは経と緯とを合した名称であり、後代の「五行」を論じた学者は間違った解釈をしているにすぎないという（注2））説の証拠を述べさせてほしい。『書経』大禹謨では「正徳利用厚生」を「三事」としており、「水火金木土穀」を「六府」としている（注3）。ここで「正徳」を「水火」に配しているのは、ちょうど（水火が正徳と同様に）天から受けたものであって、人為を用いないものだからである（注4）。「土穀」を「厚生」に配しているのは、ちょうど（人が）大地を地味豊かにも乏しくさせることも出来る一方で、豊作と凶作とを自在にすることができないようなものだからである（注5）。「金木」を「利用」に配しているのは、（金木が）伸ばすことも縮めることも、丸くすることも角張らせることも出来るもので、人の手で変え改まるものだからである（注6）。そのため（六府のうち）「水火」「土穀」は「定位」である。「金木」は「空位」である（注7）。「定位」のことを「経」といい、「空位」のことを「緯」という（注8）。「経」を抛り所として綾どりを完成させるのが「緯」である。「定位」を抛り所として変化していくものが「空位」である。だから「生々無已」（注9）とは、「空位」と「定位」とが互いに巡り合い織り成され続いていくことを言っているのである。だから私は先ほど「五行」とは経と緯とを合した名称であり、後代の「五行」についての考えを述べた者は間違った解釈をしているにすぎない」と言ったのです」と。

（注1） 「談五行」は「海保子」と「或」の問答体でできた文章である

が、ここの「吾」は前文の「後之語五行者独謬矣」を受けて「其証」を「言」ことを願うのであるから海保子の自称ということになる。「言」とは自分から話すこと、もしくは自分のことを述べる際の「いう」である。

- (注2) 「其」は前文「後之語五行者独謬矣」を受けた代詞である。前文の内容については「談五行訳注稿（4）」を参照していただきたい。
- (注3) 『書経』大禹謨に「禹曰、於、帝念哉。徳惟善政。政在養民。水火木金土穀、惟修。正徳利用厚生、惟和」とあり、その後文で「水火木金土穀」を「六府」、「正徳利用厚生」を「三事」としている。
- (注4) 「正徳」を「水火」に配することについて「猶所受於天而不用作為者也」と述べているところは難解である。青陵が『書経』大禹謨の「正徳」をどのように解釈し、ここで用いたかは定かではないが、青陵は『老子国字解』では「正」について「正は一にして止ると書きたる字也。四方よりだんだん中へよりて、とんとよりかたまるところは、少さき星になる理也。是を正と云ふ也。的の黒星也。的をかけて弓を射るに、左右の手足、法の通りにて一分一釐もちがひなければ、矢は皆的の黒星へあたる理也。ゆへに定木の手本と云ふ事になる也」（『老子国字解』『全集』p. 924）として、「定木の手本」ともなるべきものであるとする。また「徳」については『洪範談』に「徳は恵の字なり。直心と云ふ事なり。天より下されたるままの心、一向に自己流のなき事なり」「徳とは天理にかなひたる心の事なり」（『洪範談』『全集』p. 647）、また「徳の古字は恵の字なり。直心なり。天より賜はりたるままの心を恵といふ。自己流のない事なり。天のままにて人のこしらへ心の入らぬをいふなり。直はなほしと訓ず。まがらぬ事なり。天より賜はりたるままの心は、一向に人作なきゆへにまがらぬなり。甚直きなり。天理の通りなり」（『洪範談』『全集』p. 600）と、「徳」は「恵」であり「直心」であって、それは「天より賜はりたるまま」で人の作為が

差し挟まれない心とされるが、それらは「談五行」本文の「受於天」「不用作為」とも結びつく。これらのことからここでは「正徳」を「正直心」と関連づけて解釈した。

- (注5) 「肥瘠」とは地の養分が豊富であるか乏しいかを指し、「豊耗」は豊作と凶作を指す。土地の養分を増やすも減らすも人の作為の結果の範疇であるが、豊作凶作は人の手を離れた天地自然の理の中にあることを指していると考え、それに従い解釈した。ただ本来は「民の生活を豊かにすること」を意味する「厚生」と「土穀」の関連は不明である。或いは『書経』洪範「土爰稼穡」の「土」解釈と結びつけ、「稼穡して出来たる五穀」(『洪範談』『全集』p. 623)が「草木の長ずるよふに、目には見へぬども、いつか大きふなるなり」(『全集』p. 622)のように、「動かずに物を生ずるは土なり」(『全集』p. 623)という、「土」が「稼穡」により「五穀」(＝「穀」)を生み、物を生育することの手厚いことを「厚生」とみて、「土穀」を「厚生」に配すると考えているのかもしれない。ただしそうなると、「土」「稼穡」は『洪範談』では人の手を離れたものとされて「潤下・炎上・稼穡は天のする事なり」(『洪範談』『全集』p. 621)と「水火土」が一括りにされるが、「談五行」では「潤下・炎上」は天のことであり「稼穡」は人の手によるものとされ、「土」も人に配されるという、『洪範談』と「談五行」の「土爰稼穡」解釈の違いとの整合性が問題となる。詳しくは「談五行訳注稿(1)」の【現代語訳(六)】、また拙稿「思考の枠組みから見た海保青陵の思想の展開」(『東洋学研究』第五十四号 平成二十九年三月)を参照していただきたい。あるいは「肥瘠」「豊耗」とで「可」「不可」の線引きがなされていることが、そのまま「談五行」(稼穡は人の手)と『洪範談』(稼穡は天)との違いを表しているのかも知れない。

- (注6) 「木はきりまげて、扱、きりてすぐにするものなり」「円にも方にも、四角八角のぞみしだいに打ちてなをすものなり」(『洪範談』『全集』p. 620)とあるように、金属や木は人の手によつ

て加工され形を自由に变化させることが出来るもので、水火土とは区別される。そのため「人に従いて」とされる。

（注7）「定位」と「空位」については「談五行訳注稿（2）」の【現代語訳（二）】の（注9）に詳しい。また前述の拙稿「思考の枠組みから見た海保青陵の思想の展開」では、青陵の思考の枠組みには二定位一空位と三定位一空位の二つのパターンがあることを示した上で、その思考がどのように展開したのかを考察している。

（注8）「経」とは織物の縦糸、「緯」とは横糸のことであり、そこから転じて時代や社会を一貫する普遍の真理を「経」という。青陵の「経」「緯」解釈については「談五行訳注稿（4）」の【現代語訳（三）】の（注1）に詳しい。

（注9）『易経』繫辭上「生生之謂易」とあり、「生々無已」とは次々と生み出されていく世界の活動がとどまらない様子を指す。

【原文（二）】

曰印度之四大、欧羅之四元、与子説異乎。

曰否、無異矣。即老子之道大天大地大王亦大之説也^{（注1）}。水火地経也。風緯也。水火土猶水火地也。天地人也。風猶氣也。道也。水火土皆有氣。皆有風。皆有道。故氣風道三者空位也。依実位而有此氣者也。氣有兩^{（注2）}、曰陰、曰陽。故天地人陰陽、猶水火土氣也。猶地水火風也。猶王地天道也。謂之三者、語自然之定位也。謂之四、謂之五者、合経緯之數也。

（注1）『叢書』『大典』『全集』ともに句読点が「即老子之道、大天大地大王、亦大之説也」となっており、「即ち老子の道は～」と読んでいるようであるが、後文を考えてもここは『老子』二十五章の「故道大天大地大王亦大」の引用であるため、句読点を改めた。

（注2）『叢書』『大典』共に「兩」であるが、『全集』のみ「兩」字が「雨」字になっている。しかし下文「曰陰曰陽」を見ても、こ

こは「両」字であり、『全集』は字形が近いため誤ったものと考えられるため、ここでは「両」字のままとした。

【書き下し（二）】

曰く、印度の四大、歐羅の四元は、子の説と異なるか、と。
曰く、否、異なる無し。即ち老子の、道は大にして、天も大、地も大、王もまた大の説なり。水火地は経なり。風は緯なり。水火土は猶ほ水火地のごときなり。天地人なり。風は猶ほ気のごときなり。道なり。水火土に皆な気有り。皆な風有り。皆な道有り。故に気風道三者は空位なり。実位に依りて此の気有る者なり。氣に両有り。曰く陰、曰く陽なり。故に天地人陰陽は、猶ほ水火土気のごときなり。猶ほ地水火風のごときなり。猶ほ王地天道のごときなり。之を三と謂ふ者は、自然の定位を語るなり。之を四と謂ひ、之を五と謂ふ者は、経緯を合するの数なり。

【現代語訳（二）】

（ある者が）「インドで言われる「四大（種）」、ヨーロッパで言われる「四元（行）」は先生の（五行の）説とは異なるものでしょうか？」と（尋ねた）^(注1)。

（青陵先生は仰った）「いや、違うところはない（同じである）。と言うのは（インドの「四大種」やヨーロッパの「四元行」とは）つまり『老子』の「道大天大地大王亦大」という（四大の）説（と同じなの）である^(注2)。（インドで言う「四大種」（地水火風）の）「水火地」とは「経」であり、「風」が「緯」である^(注3)。（ヨーロッパの「四元行」（水火土気）の）「水火土」は（四大種の）「水火地」（老子の四大の）「天地人」と同じである^(注4)。（四大種の）「風」は（四元行の）「気」（四大の）「道」と同じである。（四大・四大種・四元行の）「水火土」（に該当する三つの定位（実位・経））には、それぞれ（四元行でいうと）「気」があり、（四大種でいうと）「風」があり、（四大でいうと）「道」がある。そのため「気」「風」「道」のそれぞれ三者は「空位」であり^(注5)、実位（で

ある「水火土」「水火地」「天地人」に従って、この「氣」というものを持つものである(注6)。「氣」には二つがあり、一つを「陰」といい、一つを「陽」という(注7)。だから「天地人陰陽」とは、「水火土氣」と同じであり、「地水火風」と同じであり、「王地天道」と同じものなのである。三という数を言うのは、天地自然の定位を論じたのである(注8)。四と言ひ、五と言うのは、経と緯とを足した数を述べているのである(注9)。

(注1) 「印度四大」「欧羅四元」とは「仏書を見るに、釈子は四大種とわけたり。大種といふも、洪範といふも同じ事なり」「其後に桂川氏にきけるは、欧駱州の大法あり。四元行といふよし。元行といふも、洪範といふも同じ事なり」(『洪範談』『全集』p. 588)とあるように、それぞれ釈迦の「四大種」とヨーロッパの「四元行」のことであると思われる。『前識談』「釈尊の立方がくわしき也。地水火風と四つに立る。是を四大種と云也」「老子の四大と云も、欧羅巴の四元行と云も同事也」(『全集』p. 567)、『老子国字解』「天竺にては四大種といふ也」「西洋にては四元行といふ」(『全集』p. 866)も同様である。ただし「四大」は「老子の四大」(前述『前識談』)「これを老子の四大といふ也」(『老子国字解』『全集』p. 865)などあるように他書では老子の分け方とされているが、ここでは「印度」とあるため「釈尊の四大種」のこととして解釈した。

(注2) 『老子国字解』の「故道大天大地大王亦大」の解説部分で青陵は「これを老子の四大といふ也。天地人道也」(『老子国字解』『全集』p. 865)としている。ここでも老子の四大を「天地人道」として解釈した。

(注3) 「水火地」「風」とは【現代語訳(二)】(注1)に引用した『前識談』「釈尊の立方がくわしき也。地水火風と四つに立る。是を四大種と云也」(前述)とあるように、「釈尊の四大種」のそれぞれを指す。「老子の天地人道の事を釈尊は地水火風と仰られたり」(『老子国字解』『全集』p. 866)「釈氏は地・水・火・風といふ」(『洪範談』『全集』p. 588)等でも述べられている。

- (注4) ヨーロッパの「四元行」は「歐羅巴は水火土氣と云」（『前識談』『全集』p. 567）「歐駱は水・火・土・氣と云ふ」（『洪範談』『全集』p. 588）「四元行は水火土氣といふ也」（『老子国字解』『全集』p. 866）とあるように「水火土氣」であり、ここでの「水火土」は後文で「氣」とあることから、「四元行」の「水火土」と解釈した。
- (注5) 老子の四大のうち「天・地・人の三つが動かぬかずなり」（『洪範談』『全集』p. 586）で「定位（実位）」であり、「此三つの数の外に、又一つ活きたるものを入れて四にしたるなり。たとへば天と地と人と、今一つ氣といふものを入れて、天氣・地氣・人氣として、この氣はどこへも動くものなり」（同上）と、「天地人」の実位を「自由自在に飛ありく」（『洪範談』『全集』p. 587）「道」が「空位（虚位）」とされる。四大種・四元行においても「風は彼飛行の者なり」「氣は彼飛行の者なり」（『洪範談』『全集』p. 588）とされ「風」「氣」が「空位（虚位）」とされる。また『前識談』でも「真の空なる故に是を風と云也」「老子天地人道と云、真の空位を道と云なり。歐羅巴は水火土氣と云、真の空位を氣と云ふ也」（『全集』p. 567）と「風」「道」「氣」を「真の空位」としている。ただし『前識談』と『洪範談』では思考の枠組みが異なっている。その点について詳しくは前述の拙稿「思考の枠組みから見た海保青陵の思想の展開」を参照していただきたい。
- (注6) ここの「氣」は「四元行」の「氣」ではなく、下文に登場する「陰陽二氣」の「氣」であると考え、「此」字もそれに従い解釈した。
- (注7) 「氣を二つにわりて、陰・陽とわけたるゆへ五つとなれり」（『洪範談』『全集』p. 588）とあるように、陰陽二氣のこと。
- (注8) 「天・地・人の三つが動かぬかずなり。動かぬ数とは、天地自然といやといわれぬ数の事なり」（『洪範談』『全集』p. 586）、「物の自然の数は三つなり」（『老子国字解』『全集』p. 865）と、動かぬ「定位」は三であり、天地自然の理による数である。

（注9） 「経」「緯」を合わせて「四」「五」と称することについては前稿「海保青陵「談五行」訳注稿（4）」の【現代語訳（三）】と【現代語訳（四）】を参照していただきたい。

【原文（三）】

聖人分民為四。曰士、曰農、曰工、曰商。士司教、猶火之化物也。農司種菑、猶水之生物也。工司以物化物、猶土之在中、得水火造作也。此三者、有定位焉。商交易有無、非化物者、非生物者、非造作者、乃空位也。猶氣之無定体、以為功也。言四民、則不疑焉。曰四大四元、則疑焉、何也。為五行所拘也。故拘五行者、不知五行者也。就三者以分経緯、則上下為経、中為緯。就四就五、以分経緯、則三才為経、氣為緯、不亦闡然昭著乎。

【書き下し（三）】

聖人は民を分かちて四と為す。曰く士、曰く農、曰く工、曰く商。士は教を司る。猶ほ火の物を化するがごときなり。農は種菑を司る。猶ほ水の物を生かすがごときなり。工は物を以て物を化するを司る。猶ほ土の中に在りて、水火を得て造作するがごときなり。此の三者は、定位有り。商は有無を交易す。物を化する者に非ず、物を生かす者に非ず、造作する者に非ざれば、乃ち空位なり。猶ほ氣の定体無くして、以て功を為すがごときなり。四民と言へば、則ち疑はず。四大四元と曰へば、則ち疑ふ。何ぞや。五行の拘する所と為ればなり。故に五行に拘る者は、五行を知らざる者なり。三者に就きて以て経緯を分かたば、則ち上下経為り、中は緯為り。四に就き五に就きて以て経緯を分かたば、則ち三才経為り、氣緯為り。亦た闡然昭著たらずや、と。

【現代語訳（三）】

「聖人は人民を分けて四とした。（それはそれぞれ）士・農・工・商で

ある（注1）。土は教を職掌とする。（それは）ちょうど火があらゆる存在を変化させるようなものである（注2）。農は穀物や草木の栽培を職掌とする。（それは）ちょうど水があらゆる存在を生かすようなものである（注3）。工はあらゆる物で様々な物を生み出すことを職掌とする。（それは）ちょうど土が「中」にあって、水火を利用して物を造り出すようなものである（注4）。この土農工の三者は「定位」である。商はあらゆるものを交換し（お金を稼ぐものであり）（注5）、存在を変化させる者でもなく、存在を生かす者でもなく、物を造り出す者でもない。つまり「空位」である。ちょうど「気」が定まった実体を持たず、それでいて成果をだすようなものである（注6）。聖人がつくった「四民」と言えば信じてあやしまない。（それなのに同じ「四」である）「四大」「四元」と言えば信じられずあやしむ。何故かといえ、ば、「五行」（という言葉に）にとらわれてしまっているからである。だから「五行」（という言葉）にこだわる者は、「五行」を理解していない者である（注7）。三に拠って経と緯とを分ければ、上と下が経となり、中が緯となる（注8）。四や五に拠って経と緯とを分ければ、（天・地・人）三才が経となり、気が緯となる（注9）。なんとはいきりと明らかなことではないか」と。

（注1） 「土農工商」は元は『国語』齊語などに管仲の言葉として見える。また青陵は「天下の民を四つにわけて、農は百姓、工は職人、商はあきびと也。土は心を労して手足を労せぬものゆへに、智恵は土の持まへとする也」（『老子国字解』『全集』p. 841）と述べている。

（注2） 「物」とは青陵によれば「物とは人をはじめ禽・獸・草・木凡そ天地間にあるとあらゆる物なり」（『洪範談』『全集』p. 606）とあり、ここではあらゆる存在のことと解釈した。また「土は心を労して手足を労せぬものゆへに、智恵は土の持まへとする也」（『老子国字解』『全集』p. 841）、「土は鋏・鑿・算盤を手に取りるものにあらず。君上より衣食は玉る事なれば、いかにも義理にうちかからねばならぬ事なり」（『善中談』『全集』p. 476）などの「土」に関する記述からすると、「土が教を司る」とは、

「土」自らが智恵を得るために天理（義理）を学ぶことを指しているのかもしれない。

（注3） 「水之生物」の「生」は「太一生水」（郭店楚簡『太一生水』）などのような「水」による万物の生成を指すと考えられなくもないが、「水といふものは面白きものにて、先万物水がなければ生活せぬ也」（『老子国字解』『全集』p. 826）と、「水」が万物を「生活（いかす）」ものとする青陵自身の解釈に従った。

（注4） 「土」とは「上るでもなく、下るでもなく、中に居て動かずに、物をうみ出しふやすと云ふ心なり。水は下る方、火は上る方、土は中に居て、静にて物のできる方、うごかずに居れ共、養ふ事甚しきゆへに、物ふえると云ふ事なり」（『洪範談』『全集』p. 622）と、水・火の間の「中」において、そこで動かずに物を生み出す働きをもつ。「動きて物を生ずるは水火なり。動かずに物を生ずるは土なり」（『洪範談』『全集』p. 623）とある。また「談五行」でも「人居其中、用潤下与炎上而以種蕪、謂之稼穡也」と「土」に配される「人」の働きとして「中」においてながら水火を用いて「稼穡」することが述べられている。「談五行」の「稼穡」について詳しくは「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」の【現代語訳（六）】を参照していただきたい。

（注5） 「有無」は有形無形のもの全てのこと。

（注6） 「水・火・土は実位なり。気は空位なり。天・地・人は物なり。気は事なり」や「あたたかきは、あたたかき気あるゆへなり。つめたきは、つめたき気あるゆへなり。草木ののびるは、のびる気あるゆへなり」（いずれも『洪範談』『全集』p. 611）などを見ると、「気」はきまった実体をもたないが、あらゆる存在に対して働きかけ事象を起こしうるものと考えられているようである。また「気は物を自由にするものにて、自由になるもの」（『洪範談』『全集』p. 612）とも述べている。

（注7） 例えば青陵は、人相家が「金形には敗れなし」と説いていることに触れて、気（金は青陵によれば気を二つに分けたものの一つ）は形がないから敗れることがないので人相家はよく考えて

いる。しかし「氣といふべきを金といひたるは、大きに人相家の五行といふ名にまよひたるなり。凡そ人相家にかぎらず、医家を始め諸の技芸家、五行といふゆへに用にたたぬなり。四元行・四大種・四大といふたらば、くわらりとわかる事なるべし」（『洪範談』『全集』p. 615）として、世間の技芸家が「五行といふ名」に惑わされてしまっていることを述べている。

（注8） この「三」を経と緯に分けたときの「二実位」「一空位」の枠組みが、「三実位」「一空位」の枠組みと異なることへの指摘は、すでに前述の拙稿「思考の枠組みから見た海保青陵の思想の展開」にて詳述している。

（注9） 「実位が三つなり。天・地・人のよふなるものなり。上・中・下のよふなるものなり。空位が一つあり。気なり。風なり。飛行のものなり。それを陰・陽の二つにわくるゆへ五行といふなり」（『洪範談』『全集』p. 595）とあるように、「四」や「五」とは、定位（実位）が三に対して、空位が一つの場合「四」であり、その空位である「気」を陰陽二気に分けると「五」となる。